国立国語研究所学術情報リポジトリ

平成15年度日本語教育短期研修報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2019-03-05 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/1909

平成15年度日本語教育短期研修報告

「多言語環境下の子どもの言語発達・言語学習」

日時：平成15(2003)年8月8日（金）
場所：国立国語研究所講堂・第1研修室
参加人数：197名
【趣旨】

日本で生活し学ぶ外国人児童生徒や帰国児童生徒，海外に暮らす海外児童生徒などの子どもたちへの対応が重要な課題と認識されるようになっているが，日本語教育もその例外ではない。子どもは，体や心，知力や社会的能力など様々な側面において人として成長過程にある存在であることをふまえて，子どもに対することばの教育を「発達」という観点からとらえ，多言語環境にある子どもと向き合う時に，どのようなことを考える必要があるか，どのように学びを支えることができるかを考えた。

【講演とディスカッション】

・ことばの発達と学習（東京学芸大学　高木光太郎）
・多言語環境下の子どもに対する学習支援（国立国語研究所　石井恵理子）
・多言語環境下の子どもの言語発達上の問題（Putnam Northern Westchester BOCES バーンズ亀山 静子）

【分科会】

1：ことばの学習と教科の学習（高木光太郎，石井恵理子）
2：言語発達上の問題に対する取り組み（バーンズ亀山静子，金田智子）

「作文教育における，日本語教師と大学専門教員との協力のために」

日時：平成15(2003)年10月25日（土）
場所：国立国語研究所講堂
参加人数：165名
【趣旨】

大学等の高等教育機関で学ぶ留学生には，日本語でレポートや論文を書ける力が強く求められている。また，留学生を指導する立場にある大学教員や日本語教師には，留学生にそのような文章を書かせることが求められている。一般に，日本語の形式に関わる指導は日本語教師，文章の内容に関する指導は大学教員，という役割分担が考えられているようだが，言語によって表される内容と言語の形式とが密接に関連していることを考えると，作文指導においても，内容と形式とを単純に分けてしまうことは必ずしも適切ではない。同じように，留学生の文章作成能力の向上ということを考える場合も，一般の大学教員の役割と日本語教員の役割との間には，両者が同じように関わることができる（関わるべき）部分があるであろうし，そのような部分において，両者が積極的に協力しあえる関係を作り出していくことは，今後ますます重要になるはずである。

こうした協力関係を作り出していくために，本研修では，「日本語教員と専門の大学教員とでは，添削・文章指導における視点がどのように異なるか」，「専門の大学教員は日本語教育での作文指導に何を求めているのか」，「日本語教育側から一般の大学教員に対し，どのような協力を求めていけばいいのか」といった点について考えた。

【講演とディスカッション】

・日本語教師と大学専門教員との作文指導における視点の違い（富山大学留学生センター　深澤のぞみ）
・論文作成や発表用資料作成の指導をどのように行うか（東京農工大学　高木隆司）
・作文指導における日本語教員と大学専門教員とのティームティーチングの試み（東京海洋大学　大島弥生）
・コメント（国立国語研究所 イ ウンスク）

「日本語教育における文法の役割」

（金沢大学留学生センターと共催）
日時：平成15(2003)年12月14日（日）
場所：金沢大学サテライトプラザ
参加人数：78名
【趣旨】

言語教育において「文法」は必要不可欠なものである。日本語教師は，教育現場での経験を踏まえながら，現場の問題の解決に結びつくような「日本語教育のための文法」を作っていかなければならない。しかし，そのためには，「日本語教育に役立つ文法とはどういうものか」，「日本語教育のための文法について考えるためには，何をどのように勉強する必要があるのか」といった点について考えることが必要である。

本研修では，これらの点について考えるとともに，参加者から事前に提出された「文法」に関する疑問や現場での問題について答えながら，ディスカッションをおこなった。

【講演・コメントとディスカッション】
・日本語教育に役立つ文法とは（広島大学　白川博之）
・「文法」をどう勉強するか（国立国語研究所　井上優）
・「現場の声」報告（金沢大学　長野ゆり）
・コメント（佐賀大学　フォード丹羽順子）

「日本語学習をとらえなおす」

日時：平成15(2003)年12月21日（日）・23日（火・祝）
場所：東京国際フォーラム
参加人数：157人（21日基調講演），148人（21日シンポジウム），140人（23日分科会）

【趣旨】

日本語教育の世界では，1980年代以降，急速な勢いで学習者数が増大し，日本語教育に関わる人々も拡大した。新しい教授法の応用もうながされ，様々な教材や教室活動が開発されている。その一方で，学習者は量的に拡大しただけでなく，質的にも，年齢，背景文化，学習目的などにおいて多様化が進み，効率を目指した教育や，従来型の一斉授業の枠組みでは対応が難しい状況となっている。

こうした状況に呼応して，新たな学習観に基づく教育実践，調査研究が進み，学習に対する興味・関心が新たな形で高まっている。本研修では，講演，ディスカッション，分科会など様々な形で，「学習はどのようにして起こるのか」，「学習の機会や場を教師はどのように設定するのか」ということについて研究的な視点，教育的な視点の双方から検討をおこなった。

【基調講演】（21日午前）
・学習論の変遷ー「できる」・「わかる」・「まなぶ」の関係をめぐってー（青山学院大学　佐伯胖）

【シンポジウム：学習の普遍性と多様性】（21日午後）
・子どもはどのように動詞の意味を推論するのか（東京大学　針生悦子）
・学習者要因としての動機づけー個に応じた指導を目指してー（立正大学　小西正恵）
・学習環境としての教室づくりー「学習者主体」をめざす教室担当者へー（早稲田大学　細川英雄）

【分科会・全体会】（23日）
A：「漢字」の認知・学習と教育実践（担当：杉本明子）
B：教科書をとらえなおすー学習に役立てるためにー（担当：福永由佳）
C：コンピュータを用いた学習環境作り（担当：植木正裕）
D：主体的な学びに対する他者の関わり（担当：椙本総子）
E：「教室」の役割（担当：石井恵理子）

「ひろげる・つなぐ　漢字教育の工夫」

日時：平成16(2004)年2月28日（土）
場所：東北大学マルチメディア教育研究棟
参加人数：92名

【趣旨】

字形や読み方が複雑で，文字数も膨大な漢字の学習は，日本語学習者にとって大きな悩みであることが少なくない。一文字ずつが読めて書けるといった文字学習にとどまらず，漢字語の語構成や用法など，日本語文の中での漢字の働きを理解することによって，日本語の総合的な学習に結びついていくような広がりを持った漢字学習のために，どのような工夫が考えられるか。また，漢字の学習には長期にわたる努力が必要とされるので，学習者の動機づけや学習意欲を高め，学び続けていけるようにすることも，漢字学習においては重要なポイントである。

本研修では，「漢字について学ぶ一つ一つのステップを，漢字の世界全体，そして日本語全体への理解につなげるために何ができるか」という観点から，学習者の日本語力の向上を支える漢字力について考えた。

【講演とディスカッション】
・漢字教育を見直す（国立国語研究所　石井恵理子）
・漢字力を伸ばすーシラバス，評価の観点からー（筑波大学　加納千恵子）
・漢字力を伸ばすー漢字語彙の観点からー（東北大学　稲村真理子）
・グループ討論・全体討論

（記：井上優）